

第7章 総括

尖石遺跡は早くから知られた遺跡で、八ヶ岳山麓の縄文遺跡としては他に先駆け、明治時代にはじめて学界へ紹介された。以来、尖石遺跡は識者の注目するところとなり、遺物は学界へ報告されて研究の進展に裨益したのも少なくない。

大正時代には諏訪史編纂のため、東京帝国大学の鳥居龍蔵や八幡一郎らが踏査・発掘を行った。それは、尖石遺跡を「大遺跡」(文献:1)とみて、厚手派土器製作地での中心地遺跡の一つとして、その重要性を認めていたことによる。大正13年に刊行された鳥居による大著『諏訪史』第一巻は、大正時代の考古学研究の金字塔といわれている。

このようにして、諏訪地方の先史・原始時代の遺跡遺物が広く知れわたるなか、昭和4年に伏見宮博英殿下による諏訪郡下の遺跡探査が行われた。その際、尖石遺跡で発掘が行われたのであり、これを機に宮坂英式が発掘をはじめた。このことが、宮坂の尖石遺跡の集落研究の端緒であった。

さて、八ヶ岳山麓の「大集落地」(文献:2)である尖石遺跡の縄文集落の発掘に取り組んだ宮坂は、尖石遺跡の集落は共同広場のある特別遺構地区を中心に、住居群が西・北・南の三方面に展開する馬蹄形または環状の集落であると考えた。それまで知られていなかった縄文集落の姿がはじめて捉えられたのであり、宮坂による尖石遺跡の発掘・研究は、縄文集落研究の原点となってその後の研究の進展に大きく寄与してきた。

こうした宮坂の尖石集落の発掘・研究があって、尖石遺跡は昭和27年に「わが国文化の象徴」たる特別史跡に指定された。指定理由については、当時の答申資料からは、「高原地の著名な縄文時代中期の大集落であることが評価されている。この「著名」の意味は、この遺跡を題材に我が国で初めて縄文集落論が展開されたことを表わしていると考えられる」(文献:3)という。

また、尖石遺跡の北につづき、ともに縄文集落論の画期的研究の場となった与助尾根遺跡も、その間に介在して集落環境と集落間関係に意義をもつ地形の谷部とあわせて平成5年に追加指定された。

このようにして特別史跡の指定を受けた尖石遺跡であったが、すべての住居址を発掘して尖石遺跡の集落を明らかにしたいという宮坂の望みは将来に委ねられてきた。今回、宮坂の調査後、50年を経て行われることとなった史跡整備に伴う試掘を中心とする一連の調査は、宮坂の発掘が及ばなかった未発掘地を中心に、公有化の完了した指定地のほぼ全域を対象として実施することができた。

しかし、そうはいつても宮坂の目標としたすべての住居址、諸遺構の完全発掘への途上である。この点を明記しつつ、今回の一連の調査により、尖石・与助尾根遺跡の縄文集落で明らかになった点、また周辺遺跡との関係など、残された課題について簡単にふれておきたい。

上述のように、宮坂英式の尖石遺跡の発掘は、その大集落の復元を目的とするものであった。その宮坂の発掘成果と今回の調査成果を合わせて再度尖石遺跡の大集落を眺めてみると、一つの大環状集落とはいつてもそれは見かけ上の姿であり、実際には中期初頭末にはじまり、中期中葉を通じて営まれた尾根を違えて並立する二つの環状集落が、中期後葉には集落開始以来の紐帯関係を維持したまま、地点を移して双環状集落を営んだ結果の大集落跡であることが明確になってきた。

与助尾根遺跡の集落研究については、水野正好が与助尾根集落論を提示して以降は、水野の集落分析案の是非や再検討が議論の中心となってきた。そうしたなか、今回の試掘調査による新たな住居址の発見で、与助尾根集落を東西二つの集落からなる双環状の集落と捉えたことは、これまでの水野の集落観が見直され

る、与助尾根集落研究上の画期をなすものと思われる。

しかしながら、今回の試掘調査でも集落の全体を明らかにすることはできず、この問題を依然として将来の調査に委ねることとなったのは残念なことであった。物理的な限界から未確認の住居址も残しているであろうし、それらの住居址の探索を含め、確認された住居址内の精査、宮坂調査住居址の正確な位置の検証、東集落の中央広場の発掘などが今後の主要な課題となるであろう。

また、尖石・与助尾根の集落・集団関係については、これまでに与助尾根を尖石からの分村、あるいは移住とする議論もあったが、本報告では尖石での集落変遷と移動を軸とする検討から、与助尾根・与助尾根南・竜神平下は尖石からの分村ではなく、尖石とは異なる系統の集団によって開かれた集落であるとする見方を提示した。竜神平下遺跡の発掘は今後の課題であるが、いずれもの近接した位置関係を評価すると、排他的でない友好的な集団関係が想定されよう。

尖石と周辺集落の一体的な関係から、それらの集落が尖石を中心とする地域社会のなかで、それぞれの時期毎にどのような役割を担う集落として存続し、どのような集団関係をなして社会を構成していたか。また、広大な八ヶ岳山麓において、中期後葉の一時期に、なぜ尖石の地に集住して暮らす文化があったのかなど、地域史のなかでさらなる集落・集団関係の追及されることが期待される。このことは、そうした人文的関係のみならず、尖石遺跡を取りまく地理・地勢・植生環境なども大きく関与していると推察され、自然環境を含めて総合的に追求されるべきであろう。

尖石・与助尾根集論といえば、文字通り尖石と与助尾根の二遺跡についての個別集落と、両遺跡を本村・分村関係にあるとみる集落間関係についての議論であった。しかしながら、その後、至近の位置に与助尾根南や竜神平下遺跡が発掘されてからは、両遺跡の集落関係を論ずるには、与助尾根南と竜神平下遺跡を含めて議論されるようになったのは当然のことである。その意味では、尖石遺跡とは、尖石・与助尾根・与助尾根南・竜神平下遺跡群の総称でもありえよう。

宮坂英式による尖石・与助尾根遺跡の発掘研究は縄文集落研究の発展に大きく寄与し、尖石・与助尾根遺跡は縄文集落研究発祥の地といわれてきた。そしてその後、与助尾根南・竜神平下遺跡の存在が明らかになったことで、尖石・与助尾根遺跡の集落研究は、この二遺跡を加えて新たな段階へと至っている。こうした尖石遺跡とその周辺の遺跡、さらには南につづく新水掛・金堀場遺跡などの尖石遺跡を核とする縄文中期遺跡群は、集落間関係や集団関係の構造を捉えて縄文社会の実態を明らかにしていくという点において、これからも縄文集落研究の発展に寄与しつづけるものと確信される。

多くの関係者・識者の皆様のご理解とご協力をいただきながら進めてきた今回の一連の調査ではあったが、大方の注目されるような成果が得られたかという点については、内心忸怩たる思いがある。特に、中期中葉南集落での中央広場の推定される未公有地が未調査となっている。また、試掘調査の性格上、確認された住居址を中心とする遺構はプランの全体と内部が未調査のため、ほとんどが年代や性格を確定できていない。そのため、集落形態や変遷のみかたに正確さを欠いている。

いずれにせよ、今回の調査の及ばない場所や確認遺構の詳細調査を含めた継続的な調査研究が行われ、集落構造のさらなる追求のなされることが望まれる。

一方で、新たな課題への対応も生じてきている。これまで遺跡の西側限界とみられてきた地域外から中期中葉の住居址が発見され、遺跡の広がりが見直しが迫られている。また、谷部の水場と思われてきた南側台地下への遺跡の広がり判明し、追加指定が行われた。さらに、本書中「未公有地」と記述してきた、南尾

第7章 総括

根の中期中葉集落の中央広場が想定される区域も、追加指定地とともに令和3年度に公有化されたことで、それらの場所での調査も視野に入ってきている。

尖石遺跡の集落構造の解明には、宮坂英弐が目指した全住居址の発掘はもちろんのこと、集落環境や隣接遺跡の調査を含めてなお多くの課題を残している。集落構造の解明は、明治時代の遺跡発見時からいわれてきた尖石遺跡の「大遺跡」たる内容を明らかにするはずであり、今回の総括報告書をそのための結節点とし、尖石遺跡の調査・研究を次の段階へ進めたい。

(鵜飼幸雄)

参考引用文献

(文献:1) 鳥居龍蔵 大正13(1924)年12月『諏訪史』第一巻、信濃教育會諏訪部會

(文献:2) 宮坂英弐 昭和32(1957)年12月『尖石』茅野町教育委員会

(文献:3) 浅野啓介 平成30(2018)年5月「貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡」『月刊文化財』656号 第一法規